▷京都新聞 平成三年

人プリズム

ヘアデザイナー 中村龍馬さん

業界の革命児、と評される。「確実にしのびよる美容、理容界の斜陽」を憂える。だからこそ「業界の土になりたい」という。美しく咲く花にも、支えている枝や幹がある。根には土がある。その土に。

美容も理容も「もはや夢の職業でなくなりました」と。響きのある低い声音で。いわく。

オーナーは金もうけ主義に走る。設備ばかりを華美にして、システムとサービスと技術を置き忘れている。

一例が、髪の切り口を見れば、いかにひどいはさみを使っているか。入門者もまずは、給料や勤務時間、休日数を問う。「この仕事は、技術プラス芸術的要素なんです」。で、信条は「目で見て頭で考えず、目で見て心で考えろ」だ。

生まれ育った近江八幡市と、守山市に直営店を。ほかに独立チェーン店が多数、台北とシンガポールにも計五店ある。

目で見て心で思考

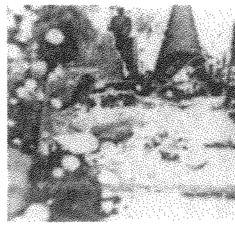
正直に「私もお客が金に見えた時期がありました」。

関学大を出て、司法試験に一度落ちた。理容と美容の免許をとり、小さな店をもつ。直後、二十五歳で英国へ五年間、渡る。誕生日が同じで、海外へ目を向けた坂本龍馬の生き方を敬慕して。

店も弟子ももてた。順調なのに「単調な人生だなぁ」。友人のカメラマンが「地獄を見てこいよ。生き方が変わるぞ」。

単身、カンボジア難民キャンプへ。ボランティアの日々だ。

帰国三日前、栄養失調の幼女の髪を切る。翌日、死んだ。母親が配給の黒パンを差しだし「美しくしてもらって幸せ者でした」。仕事をやめようと思ったおれが人の心を豊かにすることができた。「欲がとれました」。講習や講演の収入は、交通遺児寄金へ。異国での十七年前の幼児の死が、この人の原風景だ。



あなたの金銭哲学？「金は人間に余裕を与えますが、悪い余裕にでると罪悪と化します」。

女性に美を感じる時？「髪を仕上げて、バックミラーをお見せした時の鏡の中のほほ笑み」。髪のかぐわしさで感心する人？「髪に敏感な岩下志麻さん、日本の美の簡素さをもつ島田陽子さん」。

ねたまれることもある？「十年ほど前は敵も多くて。でも、男はノーマルであってはいけませんよ。個性的でないと」。

二女の父である。四十九歳。「私、新聞にでるの、十年早いですよ」。恥じらい、極細のたばこをせかせかともみ消し。

辞して、曲がり角で振り向く。遠景にこの人がまだいる。

（文・板倉 宏臣
写真・佐野 朝彦）

●● 輝く 3月の[illegible]

いい話の新聞®

発行所
いい話の新聞社
大阪本社 〒541 大阪市中央区本町1-4-7 TEL06・263・3322
東京本社 〒162 東京都新宿区榎町34 TEL03・3235・6741
福岡支社 〒810 福岡市中央区渡辺通5・23・17 TEL092・731・2521
発行日 毎月1日
定価 1部380円
年間購読料6,000円（特集及郵送料含）
特別会員20,000円
郵便振替 大阪3・311816
編集・発行人 細見繁基
©いい話の新聞社

世界を駆ける現代の"竜馬"

ヘアー・アーチスト中村竜馬

数々の傑物が輩出した明治維新。中でもひときわ異彩を放つ坂本竜馬。怒濤（どとう）のごとく時代を駆け抜けたその生き様は、まさに男の夢とロマン。

ムッシュ・リョウマこと、中村竜馬さん。一九七六年にムッシュ・リョウマインターナショナルカットスクールを開校、現在、台湾など海外にも五店を経営するヘアー・アーチスト。

研修・講演に世界をかけめぐり、その謝礼はすべて交通遺児へのカンパにするなどボランティア活動も実践している。

昭和十七年十一月十五日、近江八幡に生まれた。誕生日が坂本竜馬と同じ日だったことから、祖父が懇意にしていた同郷の堤康次郎（西武鉄道の創始者）に、「竜馬のように」と名付けられた。理髪店を営む祖父の名は竜吉、父親は竜一と、ともに"竜"に縁はあった。

カンボジア難民の澄んだ目の子供ら 戦場で知った命の尊さ

「恐れ多くも、祖父からいつも竜馬のようになれと言われてきましたけれど、子供の頃はこの名前が嫌いでした」とムッシュ・リョウマ。

しかし「この偉大な名前に恥じないように」と意識しはじめたのは、海外で仕事もするようになってからだという。

一時は弁護士への夢もあったが、関西学院大卒業後、「放浪癖ゆえに」南米ペルー、アルゼンチンを旅しながらヨーロッパへ。そしてロンドンに三年、パリに二年間の美容師修行。パリス・インターナショナル理美容選手権大会で名誉大賞受賞など数々の実績。受賞前は「ジャパニース」と蔑称的ニュアンスで呼ばれていたが、手の平を返したように「ムッシュ・リョウマ」と尊称になった。

ムッシュ・リョウマこと中村竜馬さん

第7回世界アジア理美容大会

順風満帆のようだが、そうではない。激しく落ち込んだ時期もある。人生への根源的な疑問符に囚われた。やる気がでない。仕事が手につかない。誰しもあることだが……。

ただし、ムッシュ・リョウマの場合、その解決策が生半可では気がすまなかったようだ。竜馬という偉大な名前が、あるいは自分を責めたてていたのかもしれない。十七年前、知人のカメラマンに勧められベトナム戦争さなかのカンボジア難民キャンプへ行ったのは、そんな時だった。

「死ぬかもしれない覚悟もあった」。実際、「マングローブの薪（まき）の下に二日間隠れたり、ゲリラの流れ弾が目の前を掠（かす）めたりする中をかいくぐり」ながら現地に着く。

子供たちの頭をカットしてあげたり、兵士らの手術にも立ち会った。

「麻酔なしで脚を切ったり、蛆虫（うじむし）のわいた脚を見てアゲたり。これが戦争なんだ、この悲惨な現実をそのまま人に伝えろと医者に言われました。

一週間もするとどんな死体を見せられてもだいじょうぶになった。慣れというのは恐ろしいとつくづく思いましたね」

「栄養失調で明日の命さえ分からない中で子供の目が、なんでこんなに澄んできれいなんだろう。うちの子だってこんなにきれいじゃない。その澄んだ目に心打たれ、こんなに人を好きになれる、また人も喜ばせることができると分かったんです。そして生きて帰ろうという気持ちが沸々とわいてきた」

頭にハサミを入れた少女グエン・カホが帰国間際に死んだ。死ぬ寸前まで目をきらきらさせていた。帰国できる最後のチャンスの船が出航するギリギリまで、迷っていた。わずか三カ月だったが、地獄のさなかに見た子供たちの目が、ムッシュ・リョウマを立ち直らせた。海外への出店一号はそれから六年後のこと。

「感動したらその感動を返したい。恩返ししたい」という最近のリョウマ氏。その心境はこんな話にも集約されるだろう。

三年前、家で倒れた。台湾の店で、一カ月前から常連客の指名予約があった。

「店の者に体を支えてもらいながら何とかハサミをにぎった。ふと気付くと、そのお客さまが鏡ごしに涙を浮かべているんです。いけない。お客様は感動されていたんですが、逆に言えばそこまで気づかわせてしまっていたんです。ちっとも自慢できる話じゃない。さっそくお許しの手紙を書いて出しました」

カンボジアには二年前に再訪した。ジャングルの中、少女グエン・カオの墓を、四日間かけてやっと見付けたそうである。

＝京都、「彩彩会」での八月講演より＝

（大森空太）

花に舞う蝶のようなハサミさばきをみせるムッシュ龍馬

華麗なヘアーショー観客1800人が息を飲む

美容界の風雲児 ムッシュ龍馬

韓国ソウルの一流ホテル、新羅ホテルで韓日台三国の理美容世界大会が開かれた。日本から参加した約六十名は、競技選手十三名と"リュウマグループ・スペシャルヘアーファンタジア"に出演するベテラン美容師、能面師やスタッフたち。この仕掛け人のひとりが、美容界の風雲児を自他ともに認めるが、「一介の美容師にすぎない」とも言う、ムッシュ龍馬こと中村龍馬さん（五〇）。国内には、二店舗だけだが、十年前に台湾へ進出以来、シンガポール店も含め海外五店舗。現在タイやハワイにも出店計画をもち、後進育成のためカッティングスクールも経営する。そして「アジアの美容界を活性化し、若者に夢とロマンを」と飛び回る現代リュウマの目指すものは？

ほっそり痩せているからエネルギッシュなのか？ エネルギーを燃焼しすぎて痩せているのか？ とにかくムッシュ龍馬の動きは、常にパワー全開という感じである。

二月十六日。新羅ホテルで行われた「リュウマ・スペシャル・ヘアーファンタジア」の舞台でも、それを見せつけた。

軽快な音楽とともにスポットライトをあびて、他の五人の美容師とともに舞台に現れた袴姿のムッシュ龍馬はさっそく襷がけ。モデルを前に、右へ左へと小さな体を動かし、まるで花に舞う蝶のごとくハサミをあやつり髪をカットする。息をつめて一瞬止まり、凝視し、再び指先ですばやくモデルの髪をかきあげる。広げた髪の束を上から下へ、空を切るようにハサミを走らせる。十分ほどで早くもムッシュ龍馬の額から汗がにじみ出る。全日本チャンピョンの経歴もある。ジョージ丸山氏、ヴィダルサスーンカット講師の仲厚氏らベテラン美容師も負けじと鮮やかな腕捌きを披露、釘付けになって見入る観客は約六百人。

ソウルで世界大会

やがて三十分ほど経過、舞台全員の動きが止まった。四人のモデルたちがいっせいに黒いマントを脱ぐとあでやかな舞台衣装。割れる拍手も終わらないうちに一転してサンバのリズム、舞台の裾から民族衣装やウエディングドレスを着たモデルたちがいっせいに現れる。こうしてリュウマスペシャルヘアーショーはエンディングに向かった。ファッションショーは数多いが、こうしたヘアーショーはまださほど多くない。

「理美容師はもっとプライドを持ち、技術を磨き、また、世界への視野も広めなくてはいけない。自分の仕事にもっとロマンと夢を持ってほしい」とムッシュ龍馬。

実はこのショーの前には、メンズカット、レディースカットなど五部門の技術競技があり、三国の選手百二十名ほど参加した。理美容界の技術競技と一般向けPRのヘアーショー、この二つがあってこそ業界のレベルアップと活性化につながるとの考えからである。昨年は台湾で第七回アジア理美容大会を行っているが、今回もそうした理念に共鳴する韓国の友人、金弘善氏（世界美容連盟、韓国の会長）の主催と韓国理美容界の協力によって実現したわけである。

日本と台湾からの参加者がソウル入りしたのは大会二日前だった。その当日からモデル選考会、リハーサル、ミーティング、歓迎会、パーティーと夜遅くまで続いたまる三日間。リハーサルでは舞台監督として飛び回り、パーティーでも率先して盛り上げ役を演じたりするムッシュ龍馬を、いったいあのエネルギーはどうなっているのと周りが気をもんだり心配する。

そんなハードスケジュールで望んだ大会舞台で龍馬さんはこう短い挨拶をした。「世界の自由と博愛と平等、そして平和のために。私たちは美を通じて貢献しましょう」。

堂々となおかつ簡明にそう言えるところにも、夢とロマンを信じる人・龍馬さんらしい大きさのスケールがあるのかもしれない。

（大森空太）